

終わりの日の始まり

(イザヤ40・9～11)

一、イザヤ書をめぐって

イザヤ書は、多くの方が40章以降に預言したイザヤを第二イザヤと呼び、イザヤとは別の預言者であると考えています。たしかに44章、45章には、イザヤの時代から二百年後に現れたペルシア帝国の王キュロスの名が現れます。こうあります。〈イザヤ44・28 キュロスについては『彼はわたしの牧者。わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。エルサレムについては『再建される。神殿はその基が据えられる』と言う。〉と。イザヤが、キュロスという王の名まで言い当てたとは考えにくいです。やはり、もう一人のイザヤ(第二イザヤ)がいたのであろうかと考えてしまいます。あるいは56章以降は、さらにその後の時代に当てはまるので、三人目のイザヤ(第三イザヤ)がいたのであろうかと考えてしまいます。実は私も、そのように受け止めていました。

ですが、こう考えたら話は変わってまいります。それは、イザヤ書は編集されて今日の形になったということです。もちろん編集されたのは、イザヤからずっとずっと後の時代です。そうしますと、紀元前七百年代に預言活動をし

たイザヤの預言が、ペルシア王キュロスが行ったことにあまりにも一致しているということから、「イザヤはペルシア王キュロスのことを語ったのだ」として、イザヤを尊敬して、イザヤの文書を大切に保管してきた人々がキュロスの名前を入れたという可能性は十分に考えられます。そう受け止めるなら、イザヤ書は一人のイザヤによって語られた預言か後に編集され、明らかにキュロスのことを指していると分かる箇所にも、キュロスの名を書き入れたと考えることができます。

二、良い知らせを伝える者

今日指定されたテキストを見てまいりましょう。9節の1行目、2行目をご覧ください。〈シオンに良い知らせを伝える者よ、高い山に登れ。〉とあります。

これは、だれがだれに語っているのでしょうか。語っているのは、神である主です。語られているのは、預言者イザヤと思われまます。では、〈良い知らせ〉とは、何なのでしょう。それは、イザヤが聞いた主のことばです。まずは、40章2節です。〈40・2〉 ずっと厳しいことが語られていたエルサレムですが、すなわちイスラエルですが、〈その苦役は終わり、その咎は償われている〉と語りかけられています。まさしく「良い知らせ」ではありませんか。あるいは、3節、4節です。〈40・3～4〉 〈険し

い地を平ら〉にするのは、主ご自身です。これも「良い知らせ」ではありませんか。もう一箇所、見てまいります。6節の3行目から8節です。〈40・6～8〉 草にたとえられ、花にたとえられているのは、アッシリア帝国であり、あるいはバビロニア帝国(通称・バビロン)です。まさしく、草花のように現れてはしおれ、散って行くわけです。〈主の息吹がその上に吹く〉からです。この世のものは、すべてが一時的です。しかし、〈私たちの神のことばは永遠に立つ〉のです。これも「良い知らせ」です。

それを伝えなさい、と語られています。9節3行目以降です。〈40・9 c s f〉 主がイザヤに語られたことは、「良い知らせは、力の限り語りなさい。恐れてはならない」でした。

三、終わりの日の始まり

9節7行目より10節にかけて、三つの「見よ」があります。「見よ」は、強調するときに使われる表現です。まずは、9節7行目です。〈見よ、あなたがたの神を。〉とあります。次は10節前半です。〈見よ。神である主は力をもつて来られ、その御腕で統へ治める。〉とあります。三つ目は10節後半です。〈見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の御前にある。〉です。三つの「見よ」の中で、特に10節前半の〈見よ。神である主は力をもつて来られ、その御腕で統へ治める。〉には、考えさせられます。預言者イザヤは、主の訪れを待つことを語りました。祈って待ち望むことです。40章31節をご覧ください。〈しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように、翼を広げて上ることが出来る。走っても力衰えず、歩いても疲れない。〉 さて、今一度10節前半をご覧ください。〈見よ。神である主は力をもつて来られ、その御腕で統へ治める。〉とあります。このことばは、11節との組み合わせで見ますと、意味が見えてまいります。11節に〈主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、懐に抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。〉とあります。力をもつて来られる主とは、大牧者イエス・キリストではありませんか。

「主が来られる」とは終末、すなわち終わりを意識したことばです。終わりの時代はすでに到来しました。始まりました。神であるお方、御子イエス・キリストが誕生されたからです。そしてキリストは、もう一度お出でになります。それはキリストの再臨ですが、その時に今の時代が終わります。すなわち、「終わりの日の終わり」です。私たちは一度目の来臨と二度目の来臨の間に生きています。それを教会時代と言いますが、預言者イザヤにも、教会時代のことは見えなかったようです。伏せておくのが、主の御意思だったからです。